

誠品生活日本橋イベントレポート

ジャパンプレス主宰 佐藤和孝氏トーク “侵攻から1年、ウクライナのいま”

『ウクライナの現場から』刊行記念企画

株式会社有隣堂（本社：神奈川県横浜市 代表取締役社長：松信 健太郎）は、12月27日発売『ウクライナの現場から』の刊行記念企画として、去る3月16日（木）、誠品生活日本橋（中央区 運営：有隣堂）にて、著者の佐藤 和孝氏によるトークイベントを開催しました。今回はその模様を、担当編集者のレポートとしてお届けします。ロシア侵攻から1年が経過したウクライナ情勢は、長期化の様相を呈し日々予断を許さない状況です。ウクライナの街はどのように変わったのか？

佐藤氏が、三度の現地取材で目にした実情と、最新のウクライナ情報を撮りたての現地写真とともに語っていただきました。

イベント概要

■ タイトル：トークイベント

“侵攻から1年、ウクライナのいま”

■ 登壇者：佐藤和孝氏（ジャーナリスト、ジャパンプレス主宰）

■ 開催日：2023年3月16日（木）

■ 場所：誠品生活日本橋FORUM
／オンライン（Zoomウェビナー）

■ アーカイブ：下記URLにて公開中

<https://www.youtube.com/watch?v=TmrYzOodGGY>

書籍 トークイベント

侵攻から1年、
ウクライナのいまジャーナリスト、ジャパンプレス主宰
佐藤 和孝氏

2023.3.16 Thu. 19:00～20:00



イベントレポート

2023年3月16日19:00。当日は、WBC準々決勝戦開催日と重なり世の中は大変な盛り上がり一方で、会場は熱心な参加者で埋まり、ウクライナへの関心の高さが感じられた。報道番組で数多くの出演歴のある佐藤和孝氏のダンディーな風貌によるものか、女性の参加者の姿も多く目に付いた。

佐藤和孝氏は、2022年2月24日のロシア軍によるウクライナ侵攻から、計3回現地取材を行っている。トークショーはそれぞれを象徴する写真を映し出しながら、3部に分けて行われた。

● 第1部 侵攻当初編

2022年3月4日から4月13日の取材について語っていただいた。当時はロシア軍によるインフラの破壊活動はまだそれほどの激しいものではなく、避難する人々や車列の写真などが目に付いた。国に残った人びとはウクライナのためにまず自分のできること（手作りの迷彩ネットなど）をしていた。同調圧力などでは決してなく、あくまで自ら自然に発露した想いがその源泉となっている。

● 第2部 ヘルソン編

ロシア軍の侵攻をドニプロ川東岸へと押し戻した11月20日から29日までの写真をご紹介いただいた。取材の目的のひとつに、

「占領時にロシア軍がどのようにロシア化を推し進めたか」ということがあった。ロシア語の教科書を使って授業しようとしたが、教師の拒絶に会い、なかなか上手くいかなかったようだ。どの写真も破壊の後がすさまじく、至るところに弾痕がみられた。また、略奪・拷問も著しく、戦争犯罪としてウクライナ警察が現在調査している。



佐藤和孝氏（左）と、司会を務めた出版部 梅田勝

●第3部 侵攻一年編

2023年2月11日から3月2日にかけて東部ドンバス地方に入った。特に目に付いた写真は2つある。ひとつは、ミサイル攻撃で真ん中から2分割された建物（集合住宅か?）。一見すると元々別の建造物として建てられたかのように中央部分が跡形もなく消滅している。もう1点は、戦車に潰された車を写したもの。全くのその原型をとどめないで、文字通りせんべいのようにになっている。まるで、風が吹くと「いったんもめん」のようにふわふわ舞い上がってしまいそうだ。



「佐藤和孝写真展 ウクライナの現場から」誠品生活日本橋(現在は終了)

佐藤氏は何故、そのような危険を冒してまで戦場に足を向けるのか？

「それはまず自分の眼でみたいから」という答えであった。実際に見たものこそが、絶対の事実なのだろう。

今回の戦争の終結時期についての質問もあった。答えはこうだ。

「どちらも国家の存亡をかけて戦っている。恐らく終結までには何十年もかかるだろう。実は第3次世界大戦の入り口にさしかかっているのかもしれない」

散会后、我々日本人として、あらためて何ができるかを考えさせられた。

(レポート：『ウクライナの現場から』編集担当 山口真一郎)

登壇者プロフィール

佐藤 和孝(サトウ カズタカ)

1956年北海道帯広生まれ。横浜育ち。ジャーナリスト、ジャパンプレス主宰・山本美香記念財団代表理事。24歳よりアフガニスタン紛争の取材を開始。その後、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争、アメリカ同時多発テロ、イラク戦争などの取材を続け、2003年にはボーン・上田記念国際記者特別賞を受賞。著書に『アフガニスタンの悲劇』(角川書店)、『戦場でメシを食う』(新潮新書)、『戦場を歩いてきた』(ポプラ新書)、『タリバンの眼』(PHP新書)など多数。

2022年12月、最新刊『ウクライナの現場から』(有隣堂/税込1,100円)を刊行。



佐藤和孝写真展

■タイトル：佐藤和孝写真展 ウクライナの現場から

■開催日：2023年3月22日(水)～4月11日(火)10:00～22:00 ※最終日は16:00終了予定

■入場料：無料

■場所：有隣堂横浜駅西口ジョイナス店 コミック王国通路入口 <https://www.yurindo.co.jp/store/yokohama-diamond/>

■みどころ：2022年の二度にわたる現地取材で撮影した多数の写真の中から14点を厳選していただきました。

【侵攻当初編】ロシアによるウクライナ侵攻勃発直後の2022.3.4～2022.4.13、リビウ、キーウ、イルピン、プチャでの取材から8点。ポーランド国境に向かう人々やパンの配給に群がる人々の姿が印象に残ります。

【ヘルソン編】侵攻後2回目の2022.11.20～29、ヘルソン州各地での取材から6点。国際空港や劇場、博物館が破壊・略奪されつくしている様子がわかります。

●有隣堂の出版物のご紹介

有隣新書 <https://www.yurindo.co.jp/yurin/sinsho> 単行本 <https://www.yurindo.co.jp/yurin/tanko>

●情報紙『有隣』について

1967年12月創刊の情報紙。奇数月1日発行。電子版はこちらから <https://www.yurindo.co.jp/yurin/>